"21"
4
269

尋常小學作文教授書 二

K121.82
128
2

K121.82

128

2

國光社編纂

尋常小學作文教授書

東京　國光社

尋常小學作文教授書二

教授の注意

國光社編纂

(一)作文教授は自己の思想を記し、他人に通ずる方法を授くるに外ならず、若兒童の心にもなきことを記述せしむるが如きことあらば、たゞに、作文教授の本旨にもとるのみならず、その習癖は、文字を以てする虚偽を、不正と認めざるに至るべし。德性涵養上、注意すべきことなり。

(二)作文は、自己の有する思想を明瞭に、順序よく、記述し得れば足れりとす。然れども、兒童の思想は、概、散漫にして、一定の秩序なく、これを談話するも、記述するも、他人をして、明瞭に、會

得せしむること難し。是に於てか思想整理、言語、及、記述の練習の必要起る。

(三)言語の練習は、成るべく、方言を避けて、普通の語を用ゐしめ、野卑の言語を制して、上品の言葉を用ゐしむべし。音聲は、正しく發せしめ、事は、明瞭に述べしめ、且、言葉の斷續に注意すべし。

(四)文をつゞらしむるに、兒童をして、まづ其の必要の事項を發見せしめ、順次、修飾すべき言を附加せしむることゝせば、自、思想の整理にも慣れて、明了なる文を作り得るに至るべし。

(五)生徒の作文を添削するには、あまり嚴格に渉るべからず。文意だに通せば、成るべく加筆せざるをよしとす。

(六)生徒文中に、口語と文語とを混同することありとも、文意だに通せば、可なりとす。讀書力の進むにつれて、自、あらたまるべきなり。

(七)教授の注意に就きては、第一卷のはじめ、及、第三卷、四卷にも說述せり。彼此、參照せられんことを望む。

目次

上篇

第一課　たれのおかげ(一)
第二課　たれのおかげ(二)
第三課　ノアソビ
第四課　そでをつらねて
第五課　山と川
第六課　舟　形容詞の語尾の口語を文語に改めしむ
第七課　ウミ　いと女
第八課　しほひ(一)　過去辭たりの用法
第九課　しほひ(二)　口語おゝならばさぞの用法

第十課　カヒコ　單語を文語に改めしむ
第十一課　糸トリ　單語を文語に改めしむ
第十二課　はりしごと
第十三課　モノサシ　文語なりの用法
第十四課　大工ト左官　文語ありの用法
第十五課　あたらしき家　短句の連接法
第十六課　にはとり　口語あれの練習
第十七課　アサガホ
第十八課　そーじ　口語はいついでにの用法
第十九課　キヨクセヨ　文語べし、べからずの用法
第二十課　こくや　口語いつもの用法
第二十一課　紙　單句の連接法
第二十二課　町ト村　未來辭の用法
第二十三課　すゞみ　單句の連接法
第二十四課　ほたるがり　單句の連接法
第二十五課　コノ犬　口語きつとどれの用法
第二十六課　はと　助動詞の練習
第二十七課　桃太郎(一)　命令詞の用法
第二十八課　桃太郎(二)　命令詞の練習
第二十九課　ニハトリ　助動詞の練習
第三十課　日のみはた　助動詞の練習

下篇

第一課　おまつり　にての連接法
第二課　にしきゑ

第三課　母と子供
第四課　稻かり
第五課　をさまるみよ
第六課　菊
第七課　風　兼帶主格法
第八課　田畑
第九課　糸トリバ
第十課　あきなひ
第十一課　荷物
第十二課　シシャク　にしての連接法
第十三課　時計
第十四課　年のくれ

第十五課　あたにすぐすな
第十六課　新年
第十七課　ハルノアソビ
第十八課　寒暖計
第十九課　雪ノ朝
第二十課　梅
第二十一課　天滿宮
第二十二課　三郎　助動詞ししかの用法、しかばの連接法
第二十三課　さるとかに(一)
第二十四課　さるとかに(二)　口語おや〳〵の用法
第二十五課　二宮金次郎(一)　助動詞けりの用法
第二十六課　二宮金次郎(二)　どもの連接法

第二十七課　軍人　　けれども の連接法
第二十八課　軍艦
第二十九課　兵士のかゞみ
第三十課　しょーこんしゃ　ために の用法

尋常小學

作文教授書二　上篇

第一課　たれのおかげ（一）

天皇へいかのおかげで、この學校もできましたのでございます。まことに、ありがたいことでございます。

教授例

文例　かみやふでなどは、みな、父上からいただきます。おやのおかげは、まことに、ありがたいことでございます。

第一段　豫備

目的指示　今日は、父上のおかげの、ありがたきことを書かしむることを告ぐ。

復習　讀本卷三第二課に於て授けし、親の恩の、かぎりなきことを談話す。

既習の、文章の書取をなさしむ。即

だいづや、あづきなどをうるみせを、こくやともうします。（尋常小學作文教授書一下篇第十三課）

をとこのこも、おなごのこも、みな、よろこんでゐます。（仝上第十六課）

必要の文字にして、多くの生徒の、忘れ居るべしと思はるゝものあらば、板書して之を示す。

第二段　提示

前に述べし如く、父のおかげは、かぎりなければ、一々書きつくすことを得ず。今は、只、其の一端を記するなりと告げ。紙は誰からいたゞきたるか。筆はたれからいたゞきたるか。紙筆の外に、なほ、父上よりいたゞいたものあるか。父上のおかげは、いかに思ふかなど問答し、これをまとめて談話せしめ、文に綴らしむ。

必要なる文字は、生徒のきくがまゝに、之を授く。

第三段　比較

生徒綴り終らば、批評し、添削を加ふ。

衆生徒の作文を比較して、傍、既習の文章（前記）の外仝書第二十九課と對照して、類同の點を擧げしむ。

第四段　概括

批評、添削、及、比較によりて、文章の構成につき、明確なる觀念を與へ、完成せる文章に對する概念を生ぜしむ。

範文を示し、數回練習せしめて、記帳せしむ。

第五段　應用

左の文題を與へて、これを綴らしむ。

母のおかげ　親のおかげ　先生のおかげ

(一)おこないをつゝしみ、學もんをつとめるのが、天皇へいかに、ちゅーぎでございます。

第二課　たれのおかげ(二)

(三)かみや、ふでなどは、みな、父上からいたゞきます。おやのおかげは、まことに、ありがたいことでございます。

(四)きものや、はかまなどは、みな、母上からこしらへていたゞきます。おやのおかげは、まことに、ありがたいものでございます。

す。

(五)じも、さんも、みな、先生におしへていたゞきます。先生のおかげは、まことに、ありがたいことでございます。

第三課　のあそび

(六)草ガ、アヲ〳〵ト、ハエマシテ、ヒロイノハラハ、ヨイケシキト、ナリマシタ。

(注意)春のなかば、秋のくれなどには、何れの學校にても、運動會、または、遠足の催などあるべし。此等の時には、注意すべきことを言渡したる後、自、文に書かしむること、あるべく、又、催しの後には、その狀態を記述せしむることあるべし。何れも、まつ、問答して、言語に表出せしめ、更

に、文字にて記述せしむるを可とす。但、かゝる場合には、文章は、比較的に長くとも、さほどの困難を感ぜざるべし。

(七)ケフハ、學校モオヤスミデアリマスカラ、生徒ハ、ミナ、ノアソビニマヰリマシテ、スミレ、タンポポナドヲツミテヲリマス。

第四課　そでをつらねて

(八)花ノシタデ、男ノ子ハ、ツナヒキ、女ノ子ハ、オニゴトヲシテ、アソンデヲリマス。

(九)男ノ子モ、女ノ子モ、ミナ、オモシロソーニ、アソビテヲリマス。

第五課　山と川

形容詞の語尾の口語を文語に改めしむ

(一〇)山には、うつくしい花がさいてをりまして、川には、ほそいはしがかゝりてゐます。

(一一)ほそい川（ホソキ川）　(一二)小さいはし（小サキハシ）　(一三)大きな山（大キナル山）

(一四)うつくしい花（ウツクシキ花）　(一五)うれしい花見（ウレシキ花見）　(一六)きれいな花（キレイナル花）

第六課　舟

形容詞の語尾の口語を文語に變ぜしむ

(一七)二人ノコドモガ、舟ヲモツテヰマス。ヒトツガ富士カンデ、ヒトツガ八島カンデアリマス。

(一八)富士山は高い（富士山ハ高シ）　(一九)川の水はきよい（川ノ水ハキヨシ）

(二〇)海はひろい　海ハヒロシ
(二一)私の舟は小さい　私ノ舟ハ小サシ
(二二)八島かんははやい　八島カンハハヤシ
(二三)花はうつくしい　花ハウツクシ

第七課　海、いと女

(二四)イハニ、コシヲカケテ、オキノ船ヤ、鳥ナドヲナガメマスト、ヨイケシキデアリマス。

(二五)イト女ハ、オヤノイフコトヲ、ヨクキヽマシテ、オヤノ、タベタイトイフモノヲ、タベサセマシタ。

(注意)　本題の材料は、本社の尋常小學修身書より採用したるなり。修身上の記述をせしむるも、他の場合と異なる所なし。

(二六)サカナノナイトキニ、イト女ノ母ハ、サカナヲタベタイトイヒマスカラ、イト女ハ、ドーショーカト、シンパイシテヰマシタラ、トビガ、モッテキテ、オトシテクレマシタ。

第八課　しほひ　文語たりの用法

(注意)　文語を以て文章を綴らしむるは、本課を以て始とす。毎に、口語と對照して、字句の使用方を會得せしめんことを要す。本課に於て授くべきたりは、半過去を表する助動詞なり。言語としては、過去、半過去を區別すべきものなきが如し。又、本學年の兒童には、其の區別を說明する必要もなかるべし。

(二七)けふは、しほひにて、きょーだいのこどもは、はまべにいでゆきたり。

(二八)兄弟のふたりは、とりたる、うをと、かひとをもちて、家にかへりたり。

(二九)兄弟は、家にかへり、とりたる、うをと、かひとを母に見せたり。

第九課

口語おゝならばさぞの用法

(三〇)兄はふときはぜをとり、弟は小さきえびをとりたり。

(三一)おゝたくさんとれました、父上がでらんなさったならば、さぞおよろこびなさるでありませう。

第十課

單語を文語に改めしむ

くはの葉をつみます。

クハノ葉ヲツム。

(三二)くはの葉をつんでゐます。(ツミマシタ)

クハノ葉ヲツミメリ。(ツタリ)

くはの葉をつみませう。

クハノ葉ヲツマン。

(三三)くはの葉かひこにあたへました。

クハノ葉ヲカヒコニアタヘタリ。

くはの葉をかひこに、あたへませう。

クハノ葉ヲカヒコニアタヘン。

かひこがくはの葉を食ひます。

カヒコガクハノ葉ヲ食フ。

(三四) かひこがくはの葉を食つてゐます。(食ヒマシタ)
カヒコガクハノ葉ヲ食ヘリ。(食ヒタリ)
かひこがくはの葉をくひませう。
カヒコガクハノ葉ヲ食ハン。(食フナラン)

かひこがまゆをつくります。
カヒコガマユヲツクル。

(三五) かひこがまゆをつくつてゐます。(ツクリマシタ)
カヒコガマユヲツクレリ。(ツクリタリ)。
かひこがまゆをつくるでありませう。
カヒコガマユヲツクルナラン。

(注意) りは、規則動詞の四段活のものに限りて附屬する助動詞にて、且、その第三變化にのみ連り、たりの如く、半過去を表するなり。されども、りは、働作の過去より現在にわたれるさまを示すものなれば、其の働作は、現在に關係せり。らんは推量助動詞とて、事物を推量する意を示すものなり。

第十一課　糸とり

單話を文語に改めしむ

(三六) ことしは、まゆが、よく、あがりました。
コトシハ、マユガ、ヨク、アガレリ。(アガリタリ)
ことしは、まゆが、よく、あがるでありませう。
コトシハ、マユガ、ヨク、アガルナラン。

おきぬは學校に行きます。
オキヌハ學校ニ行ク。

(三七)おきぬは學校に行きました。
オキヌハ學校ニ行キタリ。
おきぬは學校に行くでありませう。
オキヌハ學校ニ行クナラン。

(三八)おきぬは糸をとります。
オキヌハ糸ヲトル。
おきぬは糸をとつてゐます。(トリマシタ)
オキヌハ糸ヲトレリ。(トリタリ)
おきぬは糸をとるでありませう。
オキヌハ糸ヲトルナラン。

山には、みどりな花がさいてゐます。(サキマシタ)
山ニハミドリナル花サケリ。(サキタリ)

(三九)はまべにいでゝあそんでゐます。(アソビマシタ)
ハマベニイデヽ遊ベリ。(遊ビタリ)
母さまにけふのはなしをしてゐます。(ハナシヲシマシタ)
母サマニケフノハナシヲセリ。(ハナシヲシタリ)

第十二課　針仕事

(四〇)針仕事のできぬは、女のはぢでありますから、せいをだして、習はねばなりませぬ。

(四一)母様が、針仕事を、毎日、教へてくださりますので、このごろは、ほころびがぬへるよーになりました。

第十三課　ものさし　文語なりの用法

(四二)針仕事に用ゐるものさしは、くじらさしであります なり。

（注意）なりは指定解説する助動詞にて、であるの意なり。この語、動詞には、必、その第二變化に連る。但、直に、名詞、副詞にも、伴ひて、指定解説の意を表す。

（四三）大工などの用ゐるものさしは、かねざし［であります］なり。

（四四）十寸は、一尺［であります］なり。

（四五）十尺は、一丈［であります］なり。

（四六）一寸は、十分［であります］なり。

（四七）一尺は、十寸［であります］なり。

（四八）一間は、六尺［であります］なり。

（四九）一町は、六十間［であります］なり。

第十四課

大工と左官
文語ありの用法

（五〇）コヽニ大工［ガヲリマス］アリ。

（五一）大工ノドーグニ、カンナ［ガアリマス］アリ。

（五二）ノコギリ、テヲノ、カネザシナド［ガアリマス］アリ。

（五三）カネザシノ目ニハ、尺寸、分、ナドノナ［ガアリマス］アリ。

（五四）コヽニ、マタ、左官［ガヲリマス］アリ。

（五五）左官ノドーグニ、コテ［ガアリマス］アリ。

第十五課

あたらしき家
短句の連接法

（五六）單句　家をたつ。
　　　　くらをつくる。

連文　家ヲタテ、クラヲツクル。

（五七）單句　大工は、家をたつ。
　　　　左官は、へいをぬる。

連文　大工ハ、家ヲタテ、左官ハ、ヘイヲヌル。

(五八)單句　左官は、へいをぬる。
大工は、家をたつ。

連文　左官ハヘイヲヌリ、大工ハ家ヲタツ。

(五九)單句　門の前には、はしあり。
へいのうちには、松の木あり。

連文　門ノ前ニハ、ハシアリテ、ヘイノウチニハ、松ノ木アリ。

第十六課　にはとり

口語あれの練習

(六〇)ひよこが、あれ、あのよーに、ぴよ〳〵と、ないてをります。はやく、ゑをやりませう。

(六一)あれ、おやどりが、あのよーに、ゑをひろって、ひよこにあたへます。

(六二)ひよこは、今に大きくなって、朝はやく、いさましいこゑで、なくでありませう。

第十七課　あさがほ

(六三)早クオキテ、アサガホノ花ヲ見ルト、マコトニ、ヨイコヽロモチガイタシマス。

(六四)朝ガホノ花ノ色ニハ、白、赤、アヲ、ムラサキ、シボリナドイロイロアリマス。

(六五)アスノ朝ハ、アサガホヲ見ニオ出デナサイ。今朝ヨリモ、タクサン、花ガサキマセウ。

第十八課　そーじ

口語はい及ついでにの用法

(六六)ハイタリ、フイタリシテ、キレイニ、ソーヂヲシナサイ。

(六七)ハイ、ザシキヲハキマシタカラ、ツイデニ、ニハモハキマセウ。

(六八)ドコモ、ミナハキマシタカラ、ツイデニ、ゾーキンヲカケマセーウ。

第十九課　きよくせよ

文語　べし及べからずの用法

(六九)手やきものに、すみのつかぬよーに、氣をつけなさいくべし。

(七〇)もし、手に、すみのつきたる時は、すぐにあらひなさいふべし。

(七一)ふでやすゞりは、時々あらひなさいふべし。

(七二)すべて、なににても、よごれぬよーに心がけなさいくべし。

(七三)さものをよごしなさるなすべからず。

(七四)さものにて、よごれたる手をぬぐひなさるなふべからず。

(七五)手にて、せきばんをぬぐひなさるなふべからず。

(七六)すべて、なににても、きれいにして、よごしなさるなすべからず。

第二十課　こくや

口語　いつもの用法

(七七)このこくやは、しょーぢきで、ていねいでありますから、いつも、かひにくる人が、たくさんあります。

(七八)このこく屋には、いつもおはぜいのかひてがきて居ます。

(七九)この店には、いつも、白米やむぎなどが、たくさんつんであります。

第二十一課　枡

單句の連接法

(八〇)單句　十合を、一升といふ。
　　十升を、一斗といふ。

連文　十合ヲ、一升トイヒ、十升ヲ、一斗トイフ。

(八一)單句　十升を、一斗といふ。
　　十斗を、一石といふ。

連文　十升ヲ、一斗トイヒ、十斗ヲ、一石トイフ。

(八二)單句　米は白し。
　　むぎはくろし。

連文　米ハ白ク、ムギハクロシ。

第二十二課　町と村

單句の連接、及、未來辭の用法

(八三)コヽニエガケルハ、町ノヅデアラウナラン。(又ハ、ナルベシ)

(八四)カナタニ見ユル、草ブキノ家ノアルトコロハ、村デアラウナラン。(又ハ、ナルベシ)

(八五)車ニツミタルニモツハ、米デアラウナラン。(又ハ、ナルベシ)

(八六)カノ人ハ、米ヲウリニ行クデアラウナラン。(又ハ、ナルベシ)

(八七)コノ人ハ、カヒモノヲシテ、村ニカヘルノデアラウナラン。(又ハ、ナルベシ)

第二十三課　單句の連接、口語あれ〳〵の用法

(八八)單句　木ノ上ニハ、セミナク。
　　池ノ中ニハ、コヒオヨグ。

連文　木の上には、せみなき、池の中には、こひおよぐ。

(八九)あのかけひの水のおちるおとをきいても、すゞしくおもはれて、こゝろもちがよろしうございます。

(九〇)あれ〳〵、大きなこひが、二ひきうきあがりました。

第二十四課　はたるがり　單句の連接

(九一)單句　オフミハ、ウナハヲモツ。　オキヌハ、カゴヲモツ。

連文　おふみは、うちはをもち、おきぬは、かごをもつ。

(九二)はたるが、あちらにも、こちらにも、ぴかりぴかりと、とんでおります。

(九三)あれ〳〵、とらうとするうちに、あんなにたかくあがつてしまひました。

第二十五課　犬　口語きつと、及、どれの用法

(九四)犬ハ、ヨル、門ノバンヲイタシマシテ、ヌスビトナドガキマスト、キツトホヘツキマス。

(九五)コノ犬ハ、私ガカヘツテキマスト、イツモ、コノヨーニ、尾ヲフツテ、キツトオムカヘヲイタシマス。

(九六)マコトニ、カハユラシイ犬デゴザリマス。ドレ、オクソシヲ、一ツヤリマセウ。

(九七)ドレ、コレカラ、犬ヲツレテ、山アソビニマヰリマセウ。

第二十六課　はと　助動詞の練習

(九八)ニヒキノハトガ、エヲヒロヘリ。

(九九)コノコドモハ、イツモ、中ヨクアソブナリ。

(一〇〇)コノ二人ハ、グンカヲ、ヨクウタヘリ。

(一〇一)コノハトハ、トホキトコロニツレ行キテモ、ハナテバ、家ニカヘリクルナリ。

(一〇二)ナラシタルハトハ、イクサノトキ、使ノヤクニタツトイヘリ。

第二十七課　桃太郎

單句の連接及命令詞の練習

(一〇三)單句（キジハ、ハタヽヲモツ。／サルハ、舟ヲコグ。）

連文　きじは、はたをもち、さるは、舟をコグ。

(一〇四)この日本一のきびだんごを、ひょーろーにせよ。

(一〇五)犬も、いっしょに行け。

(一〇六)さるも、ともをせよ。

(一〇七)きじもついてこい。

(一〇八)さるは、ふねをこげ。

(一〇九)きじは、はたをもて。

(一一〇)犬は、ばんをせよ。

第二十八課　桃太郎

單句の連接及命令詞の練習

(一一一)單句（キジハトビコム。／サルハ、ヘイヲノリコユ。）

連文　きじはとびこみ、さるは、へいをのりこゆ。

(一一二)きじはとびこめ。

(一一三)さるは、へいをのりこえよ。

(一一四)犬は、鬼にくらひつけ。

(一一五)はやく、鬼どもをうちとれ。

(一一六)いのちがおしくば、はやくこーさんせよ。

(一一七)たからものをさしだせ。

第二十九課　はたとり　單句の連接及助動詞の練習

(一一八)單句　日の丸のはたはうるはし。
　　子供のいきほひはいさましし。

連文　日ノ丸ノハタハウルハシク、子供ノイキホヒハイサマシ。

(一一九)子供ガ、二クミニワカレテ、ハタトリヲハジメタリ。

(一二〇)タガイニ、ハタヲ、手ニ入レント、キソヘリ。

(一二一)マコトニ、イサマシキコドモナリ。

(一二二)ケンブツノモノモ、赤ヨ、カテ、白ヨ、マケルナトヨバヽリテイサミタケタリ。

第三十課　日のみはた　助動詞の練習

(一二三)日の丸は、みくにのはたのしるしなり。

(一二四)日の丸のはたは、ひら〳〵と、朝日にかゞやけり。

(一二五)日の丸のはたのひかりは、せかいにかゞやきわたれり。

41頁

～

54頁　欠

(四四)る。

菅原道眞公は、忠義の心あつかりしかば、神にまつられて、人にうやまひたふとばるゝなり。

(四五)菅原道眞公は、學問にもすぐれたる人なりしかば、がくもんの神とうやまはれて、人にたふとばるゝなり。

(四六)菅原道眞公は、梅の花を愛せられし故に、梅ばちを、天滿宮のもんとせしなり。

(注意) し、しかは、さとも變化する助動詞にて、遠き過去の意を示し、衆動詞の第五變化に連るを通則とす。但、不規則動詞には異例あり。

第二十二課　三郎

(四七)三郎ハ、二ツ年ヲトリシカバ、去年ヨリハ、オトナシクナリ

タリ。

(四八)梅ノ花ウツクシクサキシカバ、枝ヲナヲリトリテ、叔父ノモトニオクリタリ。

第二十三課　さるとかに(一)

(四九)このゑは、さるが、かにゝせがんで、柿のたねと、おむすびとをとりかへるところであります。

(五〇)かには、柿の種をまいて、水をかけたり、こやしをしたりして、せわをします。

(五一)やがて、かきの種からめがでて、ずん〳〵と大きくなって、たくさんのみがなりました。

(五二)あれ〳〵、さるが、かきのきにのぼって、かきをたべてゐます。

第二十四課　さるとかに(二)

口語おや〳〵の用法

(五三)カニガ、サルニイヂメラレテナイテヲリマスト、卵ト、ハチト、ウストガ、カニヲタスケニマヰリマシタ。

(五四)オヤ〳〵、サルハ、卵ニハネラレテ、目ヲツブサレマシタ。

(五五)オヤ〳〵、マタ、ハチニ、カシラヲサヽレテ、ニゲダシテマヰリマス。

第二十五課　二宮金次郎

助動詞けりの用法

(五六)二宮金次郎は、をさなきときにも、田畑をたがやし、なはをなひなどして、よくはたらきけり。

(五七)二宮金次郎は、ねむる時間をへらしても、讀み書き算術をまなびけり。

(五八)二宮金次郎は、あれ地をきりひらきて、なをつくり、なたねをとり、油にかへてべんきょーしけり。

(五九)二宮金次郎ハ、カネモチニナルシカタヲ、ヲシヘテ、多クノ人ヲスクヒケリ。

(注意)　文典上の意義に於ては、けりは餘程時を經しことを示す語にて諸の動詞の第五變化に連る

第二十六課　二宮金次郎ども の連接法

(六〇)二宮金次郎ハ、イロ〳〵、ナンギニアヒタレドモ、スコシモ、力ヲオトサヾリケリ。

(六一)二宮金次郎ハ、アルトキ、村ノ仕事ニ出デタレドモ、幼クテ、人ナミニハタラクコトヲ得ザリケリ。

(六二)二宮金次郎ハ、幼ケレドモ、ヨクハタラキケリ。

第二十七課　軍人 ければ の連接法

(六三)この軍人は、いくさ始まりければ、せんじょーにいでゝ、よくはたらけり。

(六四)此の軍人は、くんしょーをもらひければ、親兄弟にも、よろこばれたり。

(六五)この軍人は、せんじょーにて、すくなからぬてがらをたてければ、くんしょーをたまはりたり。

第二十八課　軍艦

(六六)敷島艦は、大なる軍艦なり。長さ、六十六間にあまれり。

連文　敷島艦ハ、大ナル軍艦ニシテ、長サ、六十六間ニアマレリ。

(六七)朝日艦ハ、我國第一ノ軍艦ニシテ、大砲ノ數五十門アリ。

(六八)軍艦ニハ、鐵ヲハリ、大砲ヲソナヘ、アマタノ軍人ノリコミタリ。

第二十九課　兵士のかがみ

(六九)大砲のたまあたれり。
大砲のたま、松島艦にあたれり。
敵の大砲のたま、我が松島艦にあたれり。
敵の大砲のたま、いきほいするどく、我が松島艦にあたれり。

(七〇)松島艦の二人の兵士、身をすてゝ、くわじをふせぎたりまことに、軍人のかゞみといふべし。

第三十課　ショーコン社

(七一)コノミ社ハ、君ノタメニ、イノチヲステシ軍人ノミタマヲマツレルトコロナリ。

(七二)チユーギノタミニ、身ヲステシ軍人ヲマツレルミ社ヲ、ショーコン社トイフ。

(七三)コヽニヱガケルハ、ヤスクニ神社トイヒテ、君ノタメ、國ノタメニ、身ヲステシ人々ヲマツレルトコロナリ。

尋常小學作文教授書二終

明治三十四年一月一日印刷
明治三十四年一月四日發行

著作權所有

著者
發行者
右代表者
印刷者

株式會社 國光社編輯所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地

株式會社 國光社
東京市京橋區築地二丁目十一番地

西澤之助
東京市京橋區築地二丁目十一番地

河本龜之助
東京市京橋區築地一丁目十八番地

尋常小學作文教授書奥附

定價

卷ノ一	金貳拾錢
卷ノ二	金貳拾錢
卷ノ三	金貳拾五錢
卷ノ四	金貳拾五錢
合計	金九拾錢

K12P.8